

●第十二回新選組書展の課題について

課題① 「誠」

新選組の袖章や隊旗などに使われた、新選組を象徴する一文字。例年の課題です。

課題② 「炮術ちふれん不残西洋ツ、致候」

※「炮術」は「砲術」、「ちふれん」は「訓練」、

「ツ」は「筒」でも可

今回の「候文」の課題は、二〇一九年五月で没後百五十年となる土方歳三が、当時隊士募集で江戸に戻っていた近藤勇と、義兄で従兄の佐藤彦五郎に宛てた書状(佐藤彦五郎新選組資料館所蔵)からの課題です。

書状は新選組の前身の浪士組が結成されて一年半ほど後の元治元年十月のもので、課題文は書状の中の「局一同炮術ちふれん不残西洋ツ、致候而毎日仕候間、おふいに此程よろしく相成、長門魁茂可相成与奉恐悦おり候」という文の一部で、既に隊士一同に火縄銃ではなく、洋式銃(ゲベル銃など)を持たせて毎日訓練を行っていたことが記され、長門の魁(長州征討の先鋒)もできくらう上達したと誇っています。剣豪集団のイメージが強い新選組が、実際には早くから洋式砲術を取り入れていたことがうかがえます。

また、手紙の他の箇所では、都で名を上げたことで多摩の地元から入隊希望者がしばしばやってくるようになったが、刀も持たず、「近藤」「土方」などと馴れ馴れしく話しかけてくる者もいて、部下に示しがつかず困っていると、そのような者は京都によささないよう指導してほしいという要望が書かれており、京都での土方の様子が伝わってきます。

なお、「炮」は「砲」のことで、江戸時代では「鉄炮」「炮術」など「炮」の字を用いることが一般的でした。また、「ちふれん」とは「訓練」のことで、一般的な旧かなづかいでは「てふれん」と書きますが、原文に従って課題としています。

課題③ 「日野」

「壬生」「鳥羽伏見」「勝沼」「流山」「会津」「箱館(函館)」に続く、新選組ゆかりの地名シリーズの第七弾です。

箱館戦争で土方歳三は戦死し新選組は降伏して、新選組はその歴史に幕を下ろしました。

土方歳三の最期の様子は元新選組隊士や旧幕府軍の兵卒によって故郷の日野に伝えられました。その後、旧幕府軍戦死者の祭祀の禁が解かれると、日野では土方や近藤を顕彰する動きが出て、高幡不動尊境内に「殉節両雄之碑」が建立されました。

「魂の帰還した地」として、故郷の日野を課題としました。



課題部分前後の読み下し

(※大字部分が課題文)

局一同砲術ちふれん残ら

ず西洋つにつて致し候て毎日

仕り候間、おおいに此程よ

ろしく相成り、長門の魁も

相成るべしと恐悦奉りおり

候

土方歳三書状 大意

(前略・時候の挨拶など)

近藤門人という松木村(八王子)の者が二名、入隊希望で屯所にやってきました。腰に刀も差さず、近藤、土方と馴れ馴れしく呼ぶので、部下の手前示しがつかず困っています。今後はこのような者が京都に来ることが無いようによろしくお願いいたします。

(中略)

隊士一同は洋式銃を持ち、毎日訓練をしており、最近では大いに練度も上がり、恐れ多いことながら長州征討の先鋒もつとめられるであろうと思えるほどになっております。

まずは以上のとおり、近況をお伝えいたしました。

(十月) 九日

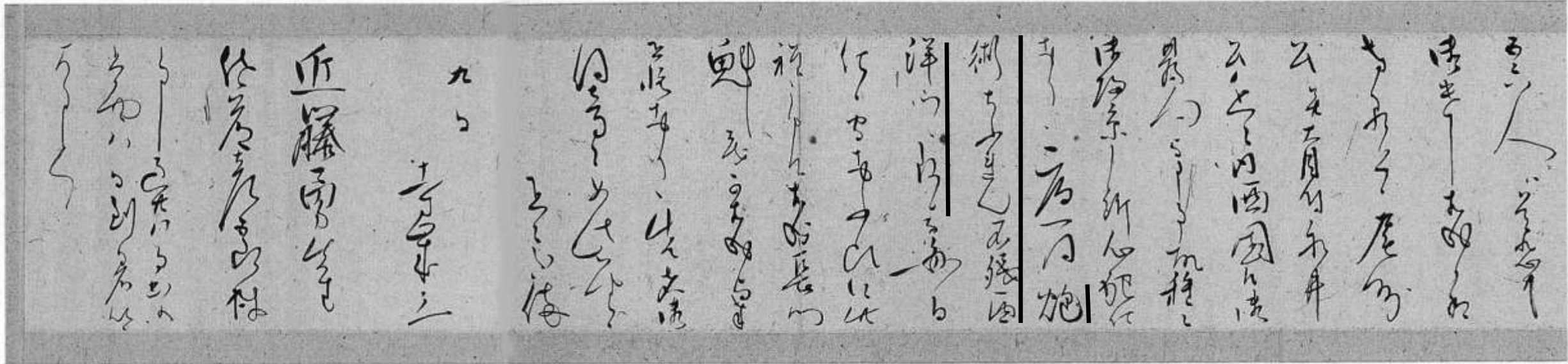
土方歳三

(※) 近藤勇 先生

佐藤彦五郎 様

なお、先月二十八日に彦五郎様が出された手紙は、八日にこちらに着いたしました。

(※) 当時近藤勇は隊士募集などで江戸に帰っており、土方歳三が留守を預かっていました。



佐藤彦五郎新選組資料館所蔵 土方歳三書状(部分/元治元年(1864年)10月/近藤勇・佐藤彦五郎宛)